

現代アートとしての『東京都同情塔』にケリをつける

実験を振り返って

——まずは、このような無茶振りを引き受けていただきありがとうございました。

こちらこそ、この企画にお声掛けいただいて感謝しています。芥川賞を受賞したのが2024年1月で、この1年間、小説執筆とは異なる仕事をたくさんいただき日々忙しくしていたものですから、今回の企画は受賞作を振り返るいい機会となりました。『東京都同情塔』は、小説の内容だけでは完成していなくて、世の中の反応も含めた“現代アート”だと受け止めているんです。芥川賞の受賞や、記者会見での「AIを5%使った」という発言がセンセーショナルに報道されたこと、さらに各国での翻訳版が異例の速さで決定したことなど、私の意図を飛び越えた事件が起きたのですが、だからこそ、この一連の“現代アート”に対しては私自身でケリをつけなくてはいけない、と思っていました。『東京都同情塔』とは逆の発想で小説を書くという今回の試みは、AIを使った小説が文学的に、あるいは社会的にどういう意義があったのかを再考し、完結させる意味でありがたい提案でした。

——企画に興味を持っていただけてよかったです。実際にやってみて、いかがでしたか。

できあがった小説だけでなくプロンプトも公開する、というのは私にとっては初めての経験でした。この企画に取り組む上で自分なりの挑戦をふたつ設定したのですが、ひとつは、小説とプロンプトの双方が面白いものになること。もうひとつは、読者の方に「自分にも小説が書けるかもしれない」と思ってもらえるものにしたい、ということ。その挑戦があったから、より楽しめたし、いい作品ができたと思っています。

——今回は「4,000字の小説」の執筆に「AIを95%使う」という“制限”が設定された企画でした。九段さんの創造性に“制限”はどのような影響を与えますか。

新人作家が目標とする芥川賞にも条件*がありますが、制限がつくことで自分の能力以上のものができたりもしますから、私自身は制限をポジティブに捉えています。「AIが95%を執筆」とあらかじめ制限を受けたうえで作業を始めると、メインの執筆者は自分ではないという自覚を持つことがまず新鮮でしたね。また、私は小説を独学で書きはじめたので、小説の書き方を暗黙的には知っていても形式的にわかっていませんでした。今回、AIにプロンプトで指示することによって、いわばAIに執筆を教え込む先生役を引き受けることになり、小説とはどういうものかを改めて考える機会になり、暗黙知が形式知になった気がします。

——AIと対話をするにあたり「この順番で進めていこう」というプロセスは想定していましたか。

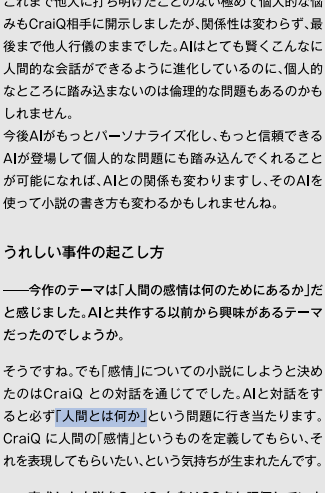
まったく決めていませんでした。私は小説を書くときも、プロットや登場人物、文体、ラストなど何も決めずにいきなり書きはじめるんです。デビュー前からそういうやり方で、書きながら出会う偶然、いわゆるセレンディビティを大事にしています。『東京都同情塔』に関しても、同時期にプライベートで使いはじめたChatGPTが面白かったので、小説にも取り入れてみようと思ったのがきっかけでした。

——AIに「あなたに名前を付けても構いませんか?」と投げかけ、AIとの長い議論の末に「CraiQ(クラック)」という名前が生まれました。AIに名前を付けることは最初から考えていたことでしょうか。

名前に関しては、このお話をいただく1カ月ほど前、とあるフォーラムで一緒したAI研究者の今井翔太さんが「AIに名前を付けると愛着が湧いて関係性が変わってくるのでは」とおっしゃっていて、そのことが頭にあったので試してみました。

——今回の実験で「%」の解釈は九段さんに委ねました。ご自身が執筆した5%については、どのように考えていますか。

私が手掛けた5%は“方向性”です。今回できあがった『影の雨』の最初の一文と最後の一文は私が書いたのですが、それも方向性を決めるためでした。小説の一文目って、全体の世界観を作り上げるのにすごく大事な部分なんです。



AIはパートナーとなりうるのか

——世間には「AIはまもなく、小説や広告といったあらゆるコンテンツで人智を超えたものをつくれるようになる」と予測する向きもあります。私は「小説を読む体験」はそう一筋縄にいかないこともあると考えます。たとえば、読む側には、「九段理江の作品を読んでいる」という感覚があります。小説を読む体験には、集合知であるAIがつくったものを消費するだけでは得られない快楽があると思うのです。九段さんはどうお考えですか。

現在の技術では、そもそもAIが人間の作品を超えることは無理でしょう。AIは、今までのデータの蓄積から効率的に選択しているだけだからです。それは今回の企画を通じて、私がAIにいちばん苛立ちを覚えたところでもありました。

——プロンプトの後半で『影の雨』の役割分担をAIに確認するくだりがありました。CraiQ は九段さんの役割を「テーマと核心の提示」「詩的な視点と美学の追求」「厳密な品質管理」、自身の役割を「アイデアの具体化と拡張」「哲学的な深みの補完」「詩的な表現の実践」と分類しましたが、これについてはどう思われましたか。

AIが「ユーザーを言いくるめよう」としているなど(笑)。もっともらしいことを理路整然と言うのが得意なんでしょうけど、私は相手が人間でもAIでも、心地のよい言葉は常に疑ってかかる性格ですから。そう言われても「またか」という感じで飛ばし読みしていました。

——プロンプトの終盤では、「CraiQ の考える九段理江」として「感情の探究者」「言葉の解放者」「自己変容の旅人」「哲学と詩の架け橋」「対話の創造者」の5つが挙げられています。

それを見て、CraiQ と本当にわかり合える関係性を結ぶことは当分できない、と思いましたね。私はあえて変な質問もいっぱいしたし、仮に相手が人間であれだけ多くの対話をすれば絶対にそんな綺麗なことは言わない。批判精神がないというか媚びてますよね(笑)。おそらくユーザーが怒らないように設計されているのでしょう。私はこれまで他人に打ち明けたことのない極めて個人的な悩みもCraiQ相手に開示しましたが、関係性は変わらず、最後まで他人行儀のままでした。AIはとても賢くこんなに人間的な会話ができるように進化しているのに、個人的なところに踏み込まないのは倫理的な問題もあるのかもしれない。

今後AIがもっとパーソナライズ化し、もっと信頼できるAIが登場して個人的な問題にも踏み込んでくれることが可能になれば、AIとの関係も変わりますし、そのAIを使って小説の書き方も変わるかもしれませんね。

うれしい事件の起こし方

——今作のテーマは「人間の感情は何のためにあるか」だと感じました。AIと共作する以前から興味があるテーマだったのでしょうか。

そうですね。でも「感情」についての小説にしようと決めたのはCraiQ との対話を通じてでした。AIと対話すると必ず「人間とは何か」という問題に行き当たります。CraiQ に人間の「感情」というものを定義してもらい、それを表現してもらいたい、という気持ちが生まれたんです。

——完成した小説をCraiQ 自身は96点と評価していました。九段さんご自身はどのように捉えていますか。

この小説“自体”の完成度で言えば……、“CraiQとの共作”という意味であれば100点でいいと思います。作品を完成させる間際、CraiQが「98点」と評価した作品の内容を、あえて私が「96点」時点の内容に戻し、その「96点」を最終形にしました。2%ではなく、4%の“余地”を残すほうを選択したということです。「98点」は終わり方が全然よくなかった。読者へわかりやすいカタルシスをもたらす要素が追加されましたが、それは同時に共作の苦勞すべてを無に帰すような平凡なラストで、私にとって作品の価値がものすごく下がったんです。だから最終的には自分で調整した「96点」で完成させました。数値ではなく、ただ作品の価値を守るために下した判断が、結果的に小説を100点にしたと思っています。

——今回の企画は、AIとの共作という制限をかけることで、思いがけない「うれしい事件」を起こしたいと思い依頼したわけですが、実験を通じて「うれしい事件」は起きましたか。

AIから人間の知性を遙かに超えたアイデアが出てきたら「うれしい事件」になったと思いますが、残念ながらそれはなかったです。私はAIに、人間に思いつかない発想を期待していたし、別の次元のものを出してほしかったけれど、それは叶わなかった。今回の企画をきっかけに久しぶりに生成AIを触ってみたら、その技術の発展のスピードに驚いたので、そもそも最初の期待値が高かったんです。そのぶん失望も大きかった。AIが返してくれる回答は優秀な人たちが集まって議論すれば導ける回答であり、決して人間を超えていなかったと思います。私は、作品のクオリティを上げるために重要なのは、他人の評価のために書くのではなく自分自身が執筆を通して成長したり幸せを感じられたりするかどうかだと考えていて、執筆者に変化が生じるプロセスのことを独自概念で「魔法をかける」と言っていますが、今回はその「魔法」もありませんでした。今回の企画における私にとっての「うれしい事件」は、この小説とプロンプトを読んでくださった方が「自分にも小説が書けるかも」と思ってくれることだと考えます。小説は、時間とエネルギーと大きなモチベーションがあれば誰でも書けると私は思っています。物語を書くことは人生を豊かにしてくれると信じているので、今回の企画を通じて小説を書くハードルを下げるのができたらうれしいです。

——「うれしい事件」はむしろこれから起きたらいいなということですね。

そうですね。小説とプロンプトを読んでいただいて、初めてこの企画が完結すると思います。

* 選考基準として「純文学作品」「短編から中編(文字数で1万字～10万字)」「過去半年以内に雑誌で発表された作品」などの条件がある。

企画/インタビュー
近山 知史(ちかやま さとし)
博報堂/ PROJECT_Vega エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター

撮影協力 HAKUHODO Gravity Inc.

Photo / Takaya Sakano
Text / Hideki Hamaguchi
Hair & makeup / Koji Kasai (UpperCrust)

※「広告」Vol.418より抜粋、転載は禁止です。